

# 無碍道 (下)

## 延 塚 知 道

はじめに

私は、前稿『無碍道』(上)において『歎異抄』に依りながら、そこに説かれている念仏往生の仏道は無碍道として尋ねた。それは私の研究成果としてというよりも、学部の子生のために基本的なことを尋ねたかったのである。今回もそれを踏まえながら、具体的には卒業論文などに示唆を与えるようなものを書いてみようと思つたのである。そのような意図であるため、新しい知見とか研究成果を期待して読まれる読者には、誠に申し訳ないことである。

さて、拙稿(上)においては、主として『歎異抄』を中心に無碍道の意味を尋ねてみた。そこでは、

本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々  
(聖典・六二二六頁)

と述べられているように、『観無量寿経』の「攝取不捨」の利益として説かれる救いが、相対的な善悪を超える道として教えられている。『観無量寿経』の苦惱する韋提希が、如来の大悲に救われるとは、比べるという人間の自我の本性を見抜かれ、善し悪し、さらには優越感と劣等感から解放されるということである。『歎異抄』の後序で親鸞が、

善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御ころによしとおぼしめすほどにしりとおし  
たらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしきをし  
りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、  
まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします

(聖典・六四〇頁)

と言われているとおりである。

さらに如来の大悲に救われるというもう一つの大きな感動は、慈悲とは、

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれど  
も、おもうがごとくたすけとぐるごとく、きわめてありがたし。浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になり  
て、大慈大悲心をもつて、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。

(聖典・六二八頁)

というように、聖道であろうが浄土であろうが、慈悲とは、必ず他人との関係を成り立たしめるものとして説かれて  
いる。人間関係を何とかよいものにしようと努力をしていくのが、われわれの常である。しかし人間の方からどんな  
努力をしても、究極的に人間関係を成り立たせることは、不可能に近い。なぜならお互いに強烈な自我と自己主張を  
もっているのが、人間なのだから、他人を立てれば自己犠牲を強いられるし、自分を立てようとするれば他人を犠牲に  
するしかないからである。念仏に帰し、自力の執心こそが人間関係に苦しむ根源であり、しかもその自力の執心に何  
の正当性もないことを、本願の教えに教えられてみれば、人間を超えた無縁の大悲の中であらゆるものとすでにして  
出遇っていたという、大きな感動を賜るのである。要するに大悲とは、人間の方からの努力ではなくて、如来の方か  
らすでにして他人との関係を実現されていたという感動である。むしろ全てのものとの関係が実現されるから、その  
感動が、小悲、中悲と選んで、大悲と感得されるのである。

したがって『歎異抄』の「摂取不捨」の救いは、「比べることからの解放」と「あらゆるものとの関係の実現」の

二つが説かれているのではないかと思われる。

## 一 眞実教

親鸞は『教行信証』『教巻』で、『大経』序分の釈尊と阿難との出遇いの箇所のみを引用して、『大経』こそが眞実教であることを証明している。そこでは、

何をもつてか、出世の大事なりと知ることを得るとならば、

(聖典・一五二頁)

といつて、『大経』こそが本当の意味で、釈尊がご自身の出世をかけた眞実教であることを、論証するのである。そこには「五徳瑞現」と「仏仏相念」が説かれている。未離欲の仏弟子である阿難が、ある日突然、釈尊に対して次のようにいっているのである。

今日世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔魏魏とましますこと、明らかなる鏡、浄き影表裏に暢るがごとし。

威容顕曜にして、超絶したまえること無量なり。未だかつて瞻覩せず、殊妙なること今のごとくましますをば。

(同上)

これは、今までの偉人としての釈尊ではなくて、阿難が如来の智慧に輝いている釈尊を仰ぎ、褒めている言葉である。それに続いて「五徳瑞現」を述べるのであるが、これも先の言葉と同じように、五つ目に「今日、天尊、如来の徳を行じたまえり」と明確に言うように、この「五徳瑞現」は、一言で言えば釈尊は如来であると褒め称えているのである。それに続いて「仏仏相念」が説かれる。

去来現の仏、仏と仏とあい念じたまえり。今の仏も諸仏を念じたまうこと、なきことを得んや。

(聖典・一五三頁)

というのである。去とは過去仏である。『大経』には、過去五十三仏が説かれている。来とは、未来仏である。例え

ば弥陀仏などがそれに当たる。現とは、今現在説法している阿弥陀仏のことである。釈尊はそれらの仏と、お互いに念じ合っているというのである。しかし今の現在をはずして、過去も未来もない。過去や未来といっても、理性で考えれば、それ自身を単独で考えることができるが、実際は現在という身が感得している内容なのだから、過去も未来も現在の中にしかない。だから釈尊は、現在の仏である阿弥陀仏を通して、過去と未来の仏を念じているのであろう。そのお姿を阿難は、「光顔魏魏」と褒めているのである。つまり阿難は、釈尊を通して今現在説法をしている阿弥陀如来を仰いでいるのである。そして、阿難は、

何がゆえぞ威神の光、光いまし爾る

(同上)

どうして世尊、あなたは阿弥陀如来の威神力である智慧の光に、輝いているのですか、と問うのである。

それに対して釈尊は、阿難に、

諸天の汝を教えて来して仏に問わしむるか、自ら慧見をもって威顔を問えるか

(同上)

と尋ねるのである。せっかく如来であると讃えている阿難に、釈尊の方からなぜこのように問うのであろうか。おそらく常識ならば、如来のことが分かるのは、如来しかないからではなからうか。仏道の常識では、菩薩の五十二位の段階を上り詰め、等覚、妙覚という如来の覚りに到達しなければ、如来のことなど分かるはずはない。にもかかわらず未離欲の阿難が如来と仰ぐので、釈尊は「本当に自分で問うたのか」と、確かめたのではなからうか。

釈尊の問いに阿難は、

諸天の来りて我を教うる者、あることなけん。自ら所見をもって、この義を問いたてまつるならくのみ (同上)

その阿難の答えに対して釈尊は、

善いかな阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念せんとして、この慧義を問えり。如来、無蓋の大慈をもつて三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵

むに真実の利をもってせんと欲してなり。

(同上)

と言われるのである。阿難、あなたは意識していないかもしれないけれど、世界中の凡夫を哀れんで、この問いを問うているのですよ。今日こそ修行をすることができない凡夫であっても、如来と仰いで仏道に立つことができる道があるということをお説く時が来た。それこそが釈尊の出世本懐であると言うのである。

そして、なぜ未離欲の仏弟子である阿難が、如来と仰ぎ仏道に立つことができたのかという道理を、本願と本願成就の教えとして説くのである。親鸞は具体的に一乗が実現していくのは、この本願の教えしかないという感動に立つて、釈尊の出世本懐をお説くこの序分をもって、真実教の証明としたのである。

## 二 本願成就文

憬興に依れば、『大経』の上巻は「如来浄土の因果」を説き、下巻は「衆生往生の因果」を説くといわれる。その下巻の最初に、本願成就文が説かれているのである。それは、阿難が阿弥陀如来に会い、浄土に往生するという仏道に立てたのはなぜかということをお説き、釈尊が説法しているのである。そこには、

それ衆生ありてかの国に生ずれば、みなことごとく正定の聚に住す。所以は何ん。かの仏国の中には、もろもろの邪聚および不定聚なければなり。  
(必至滅度の願成就文)

十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讃歎したまう。(諸仏称名の願成就文)  
あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。  
(至心信樂の願成就文)

(聖典・四四頁)

この三願の成就文が掲げられている。阿難に対して、釈尊は「上巻」で説いた四十八の本願の成就を一つ一つ挙げず

に、なぜ最初にこの三願のみの成就文を説いたのであろうか。釈尊のお仕事であるから想像をたくましくする他はないが、「三誓偈」と関係しているように思われる。

周知のように「三誓偈」は、法蔵菩薩が四十八願を説いた後に、重ねてその意義を誓う詩である。だから「重誓偈」とも呼ばれるが、そこには三つのことが誓われるのである。だから四十八願の内容は、究極的にはこの三つの願いで、代表させているのではなからうか。

我、超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、この願満足せずは、誓う、正覚を成らじ。

我、無量劫において、大施主となりて、普くもろもろの貧苦を濟わずは、誓う、正覚を成らじ。

我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ。

(聖典・二五頁)

ここではまず最初に、「超世」が誓われる。これは世間道を超えた仏道に立つということである。続いて「貧苦の救済」が誓われる。さらに上の二つを実現するために、「名号」が誓われるのである。四十八願といっても、この三つの成就こそが、本願全体の成就であると、いうのであろう。

最初の「超世」の成就是、先の本願成就文でいえば、「必至滅度の願成就文」である。次の「貧苦の救済」は、修行もできない凡夫を信心一つで救うという、「至心信樂の願成就文」である。さらに「名号」が誓われるのは、「諸仏称名の願成就文」であろう。このように四十八願の成就是、この三願の成就に代表されるから、凡夫に仏道が実現するという具体的な事実を教えるために、最初に三願の成就文を挙げたのではなからうか。

釈尊の阿難に対する第一の説法は、「必至滅度の願成就文」である。その意図するところは、「かの国に生ずれば、みなことごとく正定の聚に住す」というところにある。正定聚とは、不退転から迷いの世界に二度と帰らないこと、流転に帰らないで必ず涅槃に向かう人生に立つことである。釈尊は阿難に、あなたは今、涅槃に向かう人生（仏道）

に立ったのですよと、教えているのである。『大経』を忠実に読めば、「正定聚」は浄土に生まれてからの位として説かれていた。実は親鸞までは、「正定聚」は釈尊に従って全ての仏者が、浄土での位と読んでいた。親鸞一人はそうではない。例えば『一念多念文意』に、この「必至滅度の願成就文」を、次のように注釈している。

それ衆生あつて、かのくにうまれんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す

(聖典・五三六頁)

と説かれている。つまり親鸞は、もともと浄土の位である「正定聚」を「うまれんとするものは」と読んで、願生心ないしは信心の所に獲得される位としたのである。親鸞までの浄土教は、浄土は死んでから往生する国と伝承されてきた。しかし親鸞のこの浄土の了解によって、浄土は死んでからというよりもより積極的に、信心に浄土の功德が開かれてくると了解するべきである。ちなみに『三経往生文類』には

大経往生というは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらいに住して、かならず眞実報土にいたる。

(聖典・四六八頁)

と言って、「現生に正定聚のくらいに住す」というのが「大経往生」の、最も積極的な了解である。もともと釈尊は、生きた阿難に、今浄土での正定聚という位を得て、仏道に立ったのだと言っているのだから、浄土は死んでからのことでないことは明らかである。親鸞はその深意を読み取ったのであろう。「大経往生」といっても、正定聚に住して、浄土の功德を今生きていくことに外ならない。それは、浄土の功德莊嚴に無明の愚かさを知らされて、自我をも超えて、あらゆる人と共に浄土に生まれて往こうという願いに立つことである。そこに、人間が人間であることを超えて(超世) 仏に成っていく道、すなわち仏道という最も積極的な意味があるのである。

そのような仏道が、凡夫になぜ成り立つのであろうか。それを教えるのが「諸仏称名の願成就文」である。そこには、世界中のガンジス川の砂の数ほどの諸仏達が、阿弥陀如来の威神力を褒めて、南無阿弥陀仏と称名念仏をしてい

る、と説かれている。それはわれわれが仏道に立てるのは、自分の努力とか能力とか資質ではなく、ひとえにたくさんの念仏者の先輩の、導きに依ることを教えるのである。その先輩達の念仏の声が聞こえて、われわれは信心を起すのである。それが「至信心樂の願成就文」である。

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歎喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。

「あらゆる衆生、その名号を聞きて」とは、「諸仏称名の願成就文」に説かれる諸仏の称名念仏である。また「往生を得て不退転に住す」とは、「必至滅度の願成就文」に説かれる「正定聚」のことである。従って本願成就文は、三願の成就文が説かれるけれども、「至信心樂の願成就文」の中に、「必至滅度の願成就文」も「諸仏称名の願成就文」も収まるのである。したがって、本願成就文と言うと一般的にこの「至信心樂の願成就文」が挙げられるのである。

もちろん親鸞の宗祖たる所以は、この三願の本願成就文に、法然との出遇いの体験を言い当てられ、それぞれの願に深い意味を見いだして、『教行信証』を書かれたところにある。「諸仏称名の願」は「行巻」の標挙に、「至信心樂の願」は「信巻」の標挙に、「必至滅度の願」は「証巻」の標挙に挙げてある。もちろん「教巻」は『大無量寿経』であるから、教・行・信・証は、全てこの本願成就文を思想的な立脚地にして書かれている。だから親鸞の体験として言えば、法然との出遇いである。その体験の道理を、親鸞に自覚的に教えた箇所が、この本願成就文である。したがって、体験の教証であるこの本願成就文を立脚地として、自覚化した体験の意味を、思想として表明したものが主著の『教行信証』である。だから、それぞれの願には宗祖独自の意味を読み取っていて、それぞれの願は一つ一つ大切であることはいくらでもない。しかし本願成就文というと先に述べた理由によって、「至信心樂の願成就文」が挙げられるのである。法然がこの願を「王本願」というのも、当然のことであろう。

さて先稿では『観経』によって「無碍道」の意味を尋ねたが、そこでは救いを「撰取不捨」と表されていた。この

「撰取不捨」を親鸞は、今尋ねている『大経』の本願成就文に位置づけるのである。例えば『一念多念文意』のこの「本願成就文」の「即得往生 住不退転」の注釈で、次のようにいう。

「即得往生」というは、「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また即は、つくという。そのくらいにさだまりつくということばなり。「得」は、うべきことをえたりという。眞実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御ころのうちに撰取して、すてたまわざるなり。「撰」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。

(聖典・五三五頁)

『観経』では救いを「撰取不捨」と表現していた、その同じ救いを『大経』では「即得往生 住不退転」といい、それを一言でいえば、「正定聚」と位置づけるのである。したがって『大経』に依って「無碍道」の意味を尋ねるとすれば、この「即得往生 住不退転」・「正定聚」の意味を深く推究することが、その内容となるのである。

### 三 至心信樂の願成就文

よく知られているように、この本願成就文には親鸞独自の読替がなされている。『浄土宗全書』によれば、漢文のもともとの読みは、

あらゆる衆生、その名号を聞きて信心歡喜して、乃至一念至心に回向して、かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と正法を誹謗するとを除く。

(『浄土宗全書』第一卷・一九頁)

親鸞以外の仏者は、上のように読んだのであるが、親鸞だけは違う。煩をいとわずに、読み比べてみよう。

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。

まず、一般的な読みの方では一つの文章と読んでいた成就文を、親鸞は「乃至一念せん」で大きく二つの文章に切っている。そのため従来の読みでは、「あらゆる衆生が、信心歓喜し、臨終の一息までも真心を込めて念仏を回向し」と行を表す「乃至一念」であったものが、親鸞の読みでは文章を二つに切ったため、その「乃至一念」が「信心歓喜」と同格となって、信の一念を表す言葉に、意味を変えたのである。それは異訳の経典である、『無量寿如来会』でも、この「乃至一念」の訳が「一念の淨信」となっていることにもよる。要するに、行から信への転換は、この成就文を「念仏往生の願成就文」から、親鸞独自の「至信心樂の願成就文」へと、その意味を転換させたのである。それには法然から受け継いだ浄土宗の中に、同じように念仏を称えていても、信心の異なりによって様々な問題が起こっていたからであろう。その責任を担った親鸞は、本物の念仏者かどうかは、信心によって確かめるしかなかったのである。そのような課題の下で、信心の成就文と読んだのであろう。

さて、親鸞のように「乃至一念」で文章を切ると、「至心回向」を、どう読むかが問題である。親鸞は、「心を至し回向したまえり」と、独自の尊敬を表す送りがなをうつののである。この送りがなによって、回向する主体が、従来「衆生」であったものから、「如来」へと大きく意味を変えるのである。このような読替によって、「本願力回向」とか「如来回向」という親鸞独自の思想を、この本願成就文で表現していくことになるのである。

『一念多念文意』では、この「至心回向」を、

「至心回向」というは、「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御ころなり。「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたえたまう御のりなり。

(聖典・五三五頁)

と、注釈をしている。これは単に名号が与えられているという、客観的な事実をいつているのではない。そうではなくて、名号に帰す、という感動の中で、本願の名号であることを感得し、だからこそ十方衆生の一人として、その名号に帰した信心に領かれている事実を表明しているのである。それは、如来の方からの回向であるというところに、

その眼目がある。

親鸞は、この成就文の前半部分である「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと乃至一念せん」に、われわれの信心の成就を読み取って「本願信心の願成就の文」という独自の表題を付けて「信巻」に引用している。したがってこの前半部分に、自力無効という機の深信の自覚を読み取っているのである。さらに「至心回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せんと。唯五逆と誹謗正法とを除く、と」という後半部分には、「本願の欲生心成就の文」という表題を付けて、同じ「信巻」に引文するのである。

世親の『淨土論』の信心の表明は、

世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂國

(聖典・一三五頁)

と表白する。これはいうまでもなく本願成就の信心の表明であるから、これに習えば、前半の「本願信心の願成就の文」は「一心帰命」を表し、後半の「本願の欲生心成就の文」の方は「一心願生」を表すと見るべきである。前半部分の信心の成就はよく分かるのであるが、後半部分の欲生心の成就とは、一体何を言おうとしているのであろうか。欲生心とは、言うまでもなく、

たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が國に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覺を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんを除く。

(聖典・一八頁)

という、「至心信樂の願」に誓われている「我が國に生まれんと欲へ」という如来の本願の心、すなわち願心である。したがって本願の成就とは、本願が衆生の上に発起した心である。つまり本願と信心とは別ものではないのである。自力無効の自覚を生みながら発起した如来を信じる心は、人間の思いはもちろんな人間の心理作用などではなく、それとはまったく異質な如来の本願の衆生における発起である、という画期的な了解をするのである。ここに一般に言われる宗教の信仰とか、信心と全く異質な、親鸞の信心の了解がある。言うまでもなく「信巻」の「三一問答」も

本願と信心の同一性を論証したものである。

信心について、このような画期的な了解ができたとき、一つには、仏道に背くわれわれ凡夫がなぜ仏道に立ちうるのかという、根源的な問題に答えることになるのである。曾我量深の言う「如来我となつて、我を救い給う」という命題によく答えられているようにである。もう一つは、浄土真宗こそ「誓願一仏乗」という、大乘仏教そのものであることを開いてくる大きな知見を得たのではないかと思われる。信心が願心であれば、衆生に信心さえ起れば、願心に莊嚴される浄土は、即その信心の所に開かれるのは当然だからである。親鸞は自身の信心に、大乘としての浄土が開かれることを感得したに違いない。

さて、問題をもととして、凡夫がなぜ仏道に立つことができるのか、われわれの最大の問題である。それを、先の本願成就文に即して尋ねると、親鸞以外の仏者の読みから言えば、回向の主体がどこまでも「衆生」であることから、「即得往生 住不退転」が正確に成り立ちにくくなる。要するに死後往生なのか、それとも化土往生なのか、真実報土の往生なのかの区別がつかなくなってしまう。その点親鸞の信心の了解にしたがえば、信心がそのまま願心なのであるから、衆生に信心さえ発起すれば、願心莊嚴の世界である浄土は即開かれて、「即得往生 住不退転」が成り立つのは、必然である。ここに三界を超えた(超世)浄土の功德を生きていこうとする志願を生きることになる、その位を現生正定聚というのである。

#### 四 大般涅槃道

さて親鸞は、その浄土の功德を『入出二門偈』では、清浄功德、量功德、眷属功德、大義門功德、不虛作住持功德を、『教行信証』には、妙声功德、主功德、眷属功德、大義門功德、清浄功德、不虛作住持功德の、ほぼ七つほどの功德しか挙げていない。これらの功德は、全て真実報土を表す功德ととらえられよう。真実報土とは、「一心帰命」

「一心願生」の信心に、本願の真実の方からわれわれの方に来て、開かれる働きである。この浄土の功德の中で、寺川俊昭師は、早くから眷属功德を最も大切な功德であると、繰り返し述べておられる。つまり、真実報土の往生、あるいは願生浄土の仏道にとって、「同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり」という働きこそ、信心に感得される最も大切な浄土の功德であるというのである。私も全くその通りであると思うと同時に、この眷属功德と内面的に深く関係している主功德を、もう一つあえて挙げておきたい。

主功德は、当然浄土の主を表す功德である。そこには、

もし人ひとたび安楽浄土に生ずれば、後の時に意「三界に生まれて衆生を教化せん」と願じて、浄土の命を捨てて願に随いて生を得て、三界雑生の火の中に生まるといえども、無上菩提の種子畢竟じて朽ちず。何をもつてのゆえに。正覚阿弥陀の善く住持を径るをもつてのゆえにと。  
(聖典・二八二頁)

と述べられている。われわれが願生浄土の仏道に立って、「自信教人信」の誠を尽くすという教化の志願に立ったとき、その願いはどんなことがあっても尽きることはない。それこそが、阿弥陀の本願を命とした者の証拠である。それがなければ、仏道に立ったと言えないのである。

願生浄土の仏道は、『浄土論』に依れば、「無三宝処への往生」に極まっていく。つまり、願生浄土というところ、世を捨てて浄土に生まれていくと理解しがちであるが、決してそうではなく、三宝のないこの娑婆で、阿弥陀如来が居ますが如く生きて、如来の子として「四海の内みな兄弟」であることを教化して、「忍びて終に悔いじ」という人生を言うのである。阿弥陀如来の本願の働きによって、「地獄一定」のこの世に食い入って、教化の志願を果たしていくことこそが、われわれが自我をも超えて仏に成っていきこうとする道なのである。そのような仏道に立つものを生み出していく、根拠、立脚地を浄土というのである。一念一念が、浄土を立脚地とするのだから、宿業の身の命終われば浄土に帰って行くことは必然である。だから人生の全体が、「大経往生」という意味に転ずるのである。その

「大経往生」という人生の最も具体的な内容が、あらゆる人を如来の子として信頼していくことと、ニヒリズムを超えて本来にしなければならぬ教化の志願に立つことである。その意味で、眷属功德と同時に主功德の大切さも忘れてはならないと思われる。

さて親鸞が取り上げている功德の中で、清浄功德が浄土の総相である。総相と言うのは、浄土の二十九種莊嚴は全てこの清浄功德一つに収まる。あるいは、この清浄功德から、浄土の二十九種莊嚴が開かれると言ってもいいのである。そこでは、

「莊嚴清浄功德成就」は、「偈」に「観彼世界相 勝過三界道」のゆえにと言えり。これいかんぞ不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの浄土に生まるることを得れば、三界の繋業畢竟じて牽かず。すなわちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得、いづくんぞ思議すべきや。

(聖典・二八二頁)

と説かれている。したがって、浄土の二十九種莊嚴は、究極的には色も無し形も無い涅槃の働きである。それが二十九種の莊嚴功德として説かれるのは、おそらく真実に背き続けるわれわれの身が感得する働きを、浄土の莊嚴功德として表現せざるを得ないのである。例えば、孤独にさいなまれていた凡夫が、一心帰命の信に孤独が破られる世界に触れた感動を、浄土は眷属功德の世界であると表現せざるを得ないのである。またニヒリズムにさいなまれ、何をしてもいのか分らない凡夫が、教化の志願を賜るとき、浄土の主を、先のような主功德として賛嘆する他はないのである。とすれば、浄土の莊嚴功德とは、宿業の身が感得する真実の働きの表現であって、そのように働く世界がどこにあるというのではなく、究極的には色も無し形も無しという涅槃の働きに外ならない。

したがって願生浄土の仏道は、浄土を立脚地にするのだから、如来の涅槃に支えられ開かれていく人生であると、とらえ直すことができる。それは生死を滅して涅槃に入るのではなく、教化の志願に貫かれてこの世を生きるのだから、生死即涅槃を実現する大般涅槃道というべきである。信心の一念一念が涅槃に支えられ、願生浄土の人生を教化

に捧げ、命終わるときまた涅槃に帰って行く。そのような大般涅槃に開かれた人生こそ、誰もが仏になっていく無上  
仏道である。『大経』によって考えるとき、このような仏道こそ「無碍道」というのである。